



雑誌記事における翻訳方略：「たとえ」のイメージ (例え・譬え・比較)をどう訳すか

藤濤，文子

(Citation)

国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 39:43-60

(Issue Date)

2013-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLDOI)

<https://doi.org/10.24546/81005051>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005051>



雑誌記事における翻訳方略

——「たとえ」のイメージ（例え・譬え・比較）を どう訳すか——

藤 濤 文 子

1. 研究の動機と目的

ある雑誌の記事で、オリジナルの英語版では野球とテニスが挙げられている（Every batter and tennis pro knows the best thwack comes when the ball hits the equipment's sweet spot.）のに、ドイツ語版では野球がゴルフに変更され¹⁾、日本語版では野球のみになっている（野球選手なら、ホームランを打つにはボールをバットの“芯”でとらえなければならないことを知っている）。これは *National Geographic* の短い記事²⁾ の冒頭である。実はこの記事の話題は、絶滅したグリプトドンの尻尾の使い方で、芯を利用していたというものであるが、まずは「芯でとらえること」が身近なスポーツに例えられている。ドイツ語版も日本語版もスポーツの例えが変更されているが、身近なスポーツを持ち出すことで、読者は直感的にイメージでき、興味も喚起されるだろう。

また同じ記事の中で、尻尾が“spiked clubs³⁾”という隠喩で表現されているところを、日本語版では「トゲが突き出た棍棒のような尻尾」と下線部が補足されて直喩に変更されている。さらにドイツ語版では、「尻尾の先端が、中世の戦争で使用されていたモルゲンシュテルンを想起させる⁴⁾」と全く別の譬えを用いている。

このように、「芯でとらえること」や「尻尾の形」が、ピンとこなかったり想像がつかない場合、何らかの具体的なイメージを持ち込んで説明したり描写したりすることがある。しかしこうした「たとえ」として持ち込まれる言語イ

メージは、どの言語文化にも普遍的に通用するとは限らない。ある具体的な「たとえ」が提示されても、腑に落ちるような「身体的理解」(尼ヶ崎, 1990: 182)になるかどうかは言語文化によって異なるものであり、それゆえ翻訳では同一イメージの提示が不都合だと判断されると変更が加えられることがあるのは、上記の例でみたとおりである。では、実際にはどの程度変更が見られるのであろうか。本稿では、雑誌記事の翻訳において、「たとえ」として引き合いに出された具体的なイメージの提示がどの程度保持され、あるいは変更されるのかを調査する。まずは質的分析によりどのように訳されているかの実例を検討するとともに、数量的調査により雑誌記事の翻訳方略の傾向を探ろうとするものである。

マンデイ (2009: 115) は、「英語でのビジネス・金融関連のテキストにはメタファーが、単純なものから複雑なものまで多数含まれる。市場は ‘bullish’ (強気) や ‘bearish’ (弱気)」になる等、ビジネステキストにおいても情報価値だけではなく表出機能が重要であるとの認識を述べて、機能主義的翻訳理論のテキストタイプ別翻訳理論⁵⁾ に対する批判の一つとしている。レトリックとしての比喩表現は美的効果や説得効果を生むため、文学作品のみならず雑誌においても頻繁に用いられるものであり、また日常の言語活動において無意識的に用いられる概念メタファーは「必須の表現手段」(瀬戸, 1995: 5) である。しかし文学作品では作家固有の芸術的な文体上の個性が重要視されて、翻訳においても修辭的特徴を保持することが求められるであろう⁶⁾ が、雑誌の場合は、読者の興味を引くことと分かりやすさが求められて、上記の例で見たように変更されることも多くなると思われる。まさにマンデイの日本語訳において、‘bullish’ に添えられた「強気」という訳語には英語のような雄牛のイメージがなく、‘bearish’ の「弱気」という訳語にはクマのイメージが消えていることに注意を喚起しておきたい。

2. 研究方法と調査対象

2.1 研究方法

まず本稿で扱うのは、言葉による「たとえ」である。論理的・抽象的な説明ではピンとこないことでも、具体的な事物をもち出して譬えたり、例を挙げたりすると直観的に把握することができる。尼ヶ崎（1990）は、頭でわかるのではなく「身体でわかること」、つまり「何を言っているのかを実感するためには、具体的な事例によって肉化」（op. cit.: 168）する必要があると述べている。そして日本語の「たとえ」に、「譬喩と事例」という二つの意味があると指摘し、「認識内容の共有化のために、人は通常の説明のほかに、理解を助けるため譬喩と事例という二つのレトリックを用いる〔中略〕譬喩と事例とは視点の取り方にすぎないと言えるほどその構造が似ていることがある」（ibid.: 14）としている。本稿では、それに倣って「たとえ」として比喩と例示を考えるが、それに類する比較表現も含めたい。「たとえようもない」とは「比べられるものがない」ということであり、比喩とはそもそも比較に基づくものである。この三者ははっきり区別できる場合もあるが、次の例1では確かに視点の取り方にすぎないほど区別が容易でない。

（例1） 英語版：From a diver's perspective, they're on par with Everest or K2, requiring highly specialized training, equipment, and experience.⁷⁾

日本語版：ダイバーにとっては、特殊な訓練と装備、経験がなければ挑めない難関で、登山にたとえればエベレスト山や K2といった世界屈指の高峰に登るほどの準備と覚悟が必要になる。

例1は、水中洞窟（they）がダイバーにとっていかに危険であるかを述べた箇所であるが、あまり知られていない水中洞窟の難関さを表現するのに、良く知られた「エベレスト山や K2」を引き合いに出して、特殊な訓練と装備、経験を必要とする点で同等であると述べている。「エベレスト山や K2」そのも

のはここでの話題ではないが、この「たとえ」が提示されたために読者はいかに難関であるかを感覚的に把握できることになる。ドイツ語版では形容詞原級を用いた典型的な同等比較の形式になっている⁹⁾。そして日本語版で明示されているように、潜水を異なる領域である「登山にたとえ」で「世界屈指の高峰に登る」とことと比較し、「エベレスト山と K2 といった」高峰の例が挙げられている。とすればここで引き合いに出された「エベレスト山と K2」という具体的イメージは、譬えなのか例なのか比較対象なのかを区別しようとしてもあまり意味をなさないように思われる。そこで本稿では、むしろ「たとえ」として引き合いに出された具体的イメージそのものに着目して、それが翻訳で変化しているか否か、あるいは補足説明が付くなど提示方法が変化しているか否かを、英独日の翻訳比較により質的および量的に検証することとする。

例えば、例 1 では日独語版の両方とも「エベレスト山や K2」が再現されているため「たとえ」のイメージに変化はないが、補足説明（網掛け部分）が加わっている点は提示方法に変化があったとする。冒頭に挙げた野球とテニスの例では、日本語ではテニス削除され、ドイツ語では野球がゴルフに変更されているため、日独語版ともにイメージが変更されていると見る。尻尾の例では日本語ではイメージの変化はないが、隠喩から直喩へと提示方法が変化している。

佐藤（1992: 21）は、比喩表現のレトリックの機能として、説得力と魅力に加え「発見的認識の造形」を挙げている。特に「ような」という指標がある直喩は類似性の共通理解を前提とする必要がないため、「意外な類似性《を提案する》」（ibid.: 98）ものとして再評価されている。一方、隠喩には指標がないため、共通化された類似性に依存するものである。そうであれば、翻訳に際して、異文化的背景で類似性の認識の共有が期待できなければ、隠喩を隠喩として訳すことが困難になって直喩への変更が起こり得ることも予測できる。また西村（2009: 76）は、人間を「狼だ」という隠喩について、単に「獐猛だ」というよりは「狡猾で貪欲で腐肉をも食らう」といった狼的ないくつかの意味素性を同時に響かせ、それがもたらす効果をより豊かにする「言語的、修辭的

『含み』である」として、隠喩を「言語的ふるまい」だと主張する。レトリックの機能として挙げられている、説得力、魅力、発見的認識、豊かな含みの効果は、隠喩だけでなく直喩にも、そして例示や比較表現にも当てはまるものと思われる。本稿の質的分析においては、このような機能面についても触れながら考察したい⁸⁾。

2.2 調査対象

具体的な調査対象は雑誌記事とし、*National Geographic*¹⁰⁾ 2010年8月号および9月号の英語版起点テキスト (ST) とその日本語版 (TT-J) およびドイツ語版 (TT-D) を使用する。3つの版に共通する記事を選んで、何れかの版で例示・比喩・比較表現のイメージを使用しているものを手作業で100件になるまで収集する¹¹⁾。8月号からは以下の記事が3言語に共通している。なお、引用に際しては各記事の行末尾の括弧内の略語を用いる。

- ・ “Visions of earth” (TT-J 「大地の素顔」； TT-D „Faszination Erde“) [NG 8-1]
- ・ “Fossils” (TT-J 「化石」； TT-D „Auf einen Blick“) [NG8-2]
- ・ “The big idea” (TT-J 「未来への新発想」； TT-D „Die neue Idee“) [NG8-3]
- ・ “Deep dark secrets” (TT-J 「水中洞窟 隠された「過去」」； TT-D „Der gefährlichste Tauchgang der Welt“) [NG8-4]

9月号からは以下の記事を対象とする。

- ・ “Visions of earth” (TT-J 「大地の素顔」； TT-D „Faszination Erde“) [NG 9-1]
- ・ “Health” (TT-J 「健康」； TT-D „Auf einen Blick“) [NG9-2]
- ・ “King Tut’s family secrets” (TT-J 「ツタンカーメン 解き明かされた系譜」； TT-D „Der Fall Tutanchamun“) [NG9-3]
- ・ “The pierced heart of Madagascar” (TT-J 「奪われるマダガスカルの天然

資源」；TT-D „Alles auf Rot. Das Madagaskar-Dilemma“) [NG9-4]

こうしてタイトルを並べただけでも、遠い過去からの「化石」やまだ到来していない「未来」、そして「隠された」り「解き明かされた」りする“secrets”といった知られざる世界が紹介される記事が多いことが分かる。身近ではないこのような未知の世界を読者に魅力ある形で伝えるために、写真という画像イメージと共に、言語による「たとえ」のイメージが効果的に使用されていると思われる。もちろん雑誌といっても様々な種類があり、それぞれに何らかの傾向の違いがあるだろう。しかしここでは紙面の関係で多くの種類を扱うことができないため、まずはこの調査対象に絞る。

3. 質的分析

この節では、例示・比喩・比較対象として引き合いに出された具体的イメージが、翻訳でどのように扱われているかを事例分析により詳細に見ていく。すでに述べたように、この3カテゴリーは区別が流動的で重なるものもあるが、ここでは一応の基準を示して分析を試みる。

3.1 例示されたイメージ

当該イメージの前に、「例えば」と補えるものは例示に入れることができるだろう。まずイメージの変化したものとしていないものを挙げておく。水中洞窟についての記事 [NG8-4] では、自然に形成された洞窟内部を、「人工の構造物のようだ」と譬えた直後に次のように続く。

(例2) ST: I'm reminded simultaneously of the outer walls of Mycenae and the gallery in Khufu's Great Pyramid.

TT-J: ギリシャの古代遺跡の城壁やクフ王の大ピラミッドの回廊を思い起こさせる。

この二つの下線部は、文脈から人工の構造物の例として引き合いに出されたと考えられる。この二例のイメージが二重写しとなって、未知の洞窟内部の形状を思い浮かべることができるだけでなく、人類の遺産としての貴重な価値と自然の神秘的な力を感じさせる「含み」をもたせると思われる。しかし「クフ王の大ピラミッドの回廊」はそのまま再現されているが、一つ目の例を日本語版では「ミケーネ遺跡」という固有名詞は避けて「ギリシャの古代遺跡の城壁」と一般化している。誰でも知っているピラミッドに比べ、ミケーネ遺跡は例としてはふさわしくないとの判断があったようだ。一般化されてしまうと形についての情報がなくなるが、それでも「ギリシャの古代遺跡」というイメージがもつ豊かな「含み」を感じさせるのには成功しているだろう。なおこの箇所は、ドイツ語では両者とも削除されている。

また昆虫食の記事 [NG9-2] においては、ドイツ語版の冒頭は、„Wenn man heute schon bayerische Weißwurst in Tokio und umgekehrt bei uns an jeder Straßenecke rohen Fisch aufgetischt bekommt [東京でバイエルンの白ソーセージが、そして逆にドイツのどの街角でも生の魚が食べられる]“と、伝統食ではない料理の例で始まっている。そしてそういう時代なのだから、昆虫食にまで料理の種類を増やしてもいいでしょうと続くのであるが、まずはドイツ人読者の関心を引き付けてから昆虫食へと導入する仕掛けである。そうした例の延長線上に昆虫食があるとの論理が展開されており、「説得力」を狙った例と言えるだろう。実はこれを含む冒頭の2文11行は全くの新規追加であり、STにはこれに対応する情報が含まれていない。一方、STの記事の末尾は、昆虫食の時代になると、“a fly in your soup could come with the chef’s compliments”という気の利いたユーモアで締めくくられている。下線部の「スープのハエ」というイメージは、レストランの苦情の例としてジョークにもなる表現であるが、それが引き合いに出されてちゃんとしたメニューとして通用させる逆転の面白さがある。しかしこの箇所をドイツ語版も日本語版も削除している。恐らくドイツ語版では冒頭にかかなりの分量の追加があるため、全体的なレイアウトの同一性を保持するために別の箇所を削らざるを得ないとい

うスペース上の理由もあるのだろう。このように、雑誌翻訳においては文単位の追加や削除が数多く見られる。

上に挙げたいくつかのタイプを分かりやすく表で示すと、以下の表1のようになる。変化したものは[+]、変化のないものは[-]で表示する。変化したものについては、変化の種類もカッコ内に表示する。

表1：例示によるイメージ

			イメージの変更	提示方法の変更
例示1	ST	the outer walls of Mycenae		
	TT-D	-	+ (削除)	
	TT-J	ギリシャの古代遺跡の城壁	+ (一般化)	-
例示2	ST	-		
	TT-D	Weißwurst / rohen Fisch	+ (追加)	+ (例示追加)
	TT-J	-	-	
例示3	ST	a fly in your soup		
	TT-D	-	+ (削除)	
	TT-J	-	+ (削除)	

3.2 比喩で譬えられたイメージ

当該イメージを「まるで～のような」と言い換えられるものは比喩に入れられるだろう。雑誌記事の比喩翻訳で変化のないものを挙げると、水中の硫化水素の層を“a poisonous curtain (TT-J：毒のカーテン)” [NG8-4] とした隠喩は短いながら、においや吐き気に襲われるなどの長い説明に匹敵するほど印象に残る効果的な表現になっている。ただしドイツ語版では“scheint wie ein Trennvorhang [間仕切りカーテンのように見える]”として、少しイメージを変えた直喩となっている。魚の尾の描写で、“a shimmering, translucent tail that flickers like a candle flame¹²⁾ (TT-J：半透明の尾がろうそくの炎のように揺らめいている)” [NG8-4] としたのはST、TT-Jともに直喩であるが、魚とろうそくの炎という全く違うイメージが重なる面白さがあり、魚の泳ぐ様子が思い浮かぶと共に、幻想的な雰囲気を加えている。

隠喩が直喩に変更されたものとしては、例えば“smell rotten eggs (TT-J：

腐った卵のようなにおい)”や“the labyrinth of passages (TT-J: 迷宮のような洞窟)”[NG8-4] などがある。

また、“carrot-shaped baobab trees (TT-J: 巨大なニンジン을想起させるバオバブ)”[NG9-4] は、ST、TT-J ともに視覚的類似性に基づく直喩であると考えられる。実はこの記事にはバオバブの木のカラー写真が掲載されている。写真そのものは必ずしもニンジンを想起させるとは言えないが、「ニンジン」の譬えが提示された途端に、その意外な類似性が刻印されてニンジンのイメージというフィルターを通してしか見られなくなるほどである。「発見的認識」を作り出していると言えるだろう。ただしドイツ語版では、「バオバブ (Affenbrotbäume)」の語がすでに「猿のパン」というイメージを含むためか、「ニンジン」のイメージは削除された。

日本語でイメージが削除された例を挙げると、“the earth like tree rings (TT-J: えぐられる大地)”や、“the crown from the vanilla king’s head (TT-J: バニラ産業がすっかり落ちぶれ)”[NG9-4]などで、年輪や王冠のイメージが消えている。また、“a diver threads the needle through a stalagmite forest (TT-J: 「石筍の森を進むダイバー)」”[NG8-4] の例において、ST 下線部の隠喩を日本語においても針と糸のイメージを保持して「縫うように進む」と訳すことが可能であるが、ここでも隠喩を採らず単に「進む」とのみ表現している。ドイツ語も、単に「注意深く移動する」と訳しており、隠喩は採用していない。このページにも写真があり、無数の石筍が突き出ている狭い隙間をダイバーがうまくすり抜けながら進んで行く様子が視覚イメージでも提供されている。どのように「進む」のかは、視覚イメージから伝わるため、言葉による譬えが削除されたのかもしれない。さらに、空中の二酸化炭素を回収する装置を、英語で“artificial trees” (TT-D: künstliche ‚Bäume’) や“artificial leaves” (TT-D: künstliche ‚Blätter’) [NG8-3] と隠喩で表現しているところを、日本語では木や葉のイメージは全く省略している。他にも“behind closed curtains (TT-J: 謎に包まれた)”[NG9-3]などの例もあり、ST で使用されている譬えイメージをそのまま保持して訳したとしても理解に支障

が出るようには思われないケースでも、翻訳では必ずしも比喩表現が再現されるとは限らず、削除される箇所が多く見られた。

イメージが追加された例としては、“the blue holes of the Bahamas (TT-J：中米バハマの島々に口をあける水中洞窟、ブルーホール)” [NG8-4] を挙げておく。ドイツ語は英語とほぼ逐語的に対応するが、日本語版は下線部のイメージを追加して自然の神秘と不気味さを印象深く表現している。また“path cut (TT-J：開発が森を切り裂く)” [NG9-4] を TT-D では „eine rote Wunde [赤い傷]“ と新たなイメージを追加している例がある。

上に挙げた例のうちのいくつかを表2で表す。

表2：比喩によるイメージ

			イメージの変更	提示方法の変更
比喩1	ST	a poisonous curtain		
	TT-D	scheint wie ein Trennvorhang	+ (毒→間仕切り)	+ (隠喩→直喩)
	TT-J	毒のカーテン	-	-
比喩2	ST	artificial trees		
	TT-D	künstliche ‚Bäume‘	-	
	TT-J	-	+ (削除)	
比喩3	ST	the blue holes of the Bahamas		
	TT-D	die Blue Holes auf den Bahamas	-	-
	TT-J	中米バハマの島々に <u>口をあける</u> 水中洞窟、ブルーホール	+ (追加)	+ (隠喩)

3.3 比較対象として引き合いに出されたイメージ

すでに述べたように、比喩には比較が前提となつてはいるが、ここでは形容詞の比較変化（比較級および原級¹³⁾）によるものを想定し、比較対象に何を引き合いに出すかを見る。当該イメージ「より～～」といった表現に言い換え可能であれば、比較に入れていいだろう。

まず比較対象に変化のないものとしては、ツタンカーメンの記事 [NG9-3] で、ミイラのDNA鑑定が“a little less stringency than the standards needed to solve a crime (TT-D：nicht so viel Prazision bei der DNA-Ana-

lyse wie die Aufklärung eines Verbrechens ; TT-J : 犯罪捜査ほど厳しい基準を設けなくてもいい)”という例があった。形容詞の比較級ないし原級を用いた比較表現となっており、比較対象に変化はない。犯罪捜査の DNA 鑑定は報道などで身近なものとなっており、それを引き合いに出して比較することにより、厳密さの程度を判断しやすくなっている。

また、ある水中生物のサイズを説明するのに、数字ではなく「ゴマ粒」を比較対象にしている例があった。これは比較級を用いた文で、“no bigger than a sesame seed (TT-D : nicht größer als Sesamkorn ; TT-J : ゴマ粒ほどの小さな)” [NG8-4] と、3 言語の全てで同一イメージとの比較によって、いかに小さいかを表現している。一方、古い軍用飛行機の保管用地の広さを表現するのに、英語では“2600-acre” [NG9-1] と数字で敷地面積を表しているところを、日本語版では「成田空港よりもやや広い」として比較対象を挙げて比んでいる例があった。これは ST にはなかったイメージの追加である。エーカーを平方メートルに換算して数字で正確に表示することもできたであろうが、日本では施設の広さを表す単位としては東京ドームを引き合いに出すなど、具体物との比較がよく見られる。そうした慣習が影響してのことだろう。また飛行機置場の広さが問題となっているため、成田空港が使用されたのは適切かと思われるが、日本の読者向けに同化された。この場合、正確な情報を削除してまで感覚的なイメージ化が優先されている。なおドイツ語版では面積への言及は削除されている。

また昆虫食に関する記事では、小型バッタが“nearly the same protein punch as ground beef (TT-J : 牛ひき肉に匹敵するたんぱく質)” [NG9-2] を含むとされる箇所が、ドイツ語ではステーキに変わっている (ebenso viel Eiweiß wie ein Steak)。同じ牛肉であれば、単なる食材よりも正式な料理名と比較した方が、昆虫食とのギャップが大きい分、面白さが倍増するとの判断ではないか。比較のたとえばたんぱく質の量を数字で表すより、身近な食材や料理と比べることで感覚的に把握しやすくなるため、説得力が増すだろう。

さらに、水中洞窟へのダイバーは、“even more than high-altitude moun-

taineers (TT-J: 高山に挑む登山家以上に)” [NG8-4] 厳しい時間の制約にさらされているのであるが、ドイツ語版では比較対象が「アルピニスト以上に (noch stärker als Alpinisten)」となっている例があった。Alpinist はアルプス登山家のイメージを出して、広く登山家を意味するが、ここではイメージを問題にするので、より身近な具体的イメージに変更されたと見る。以上挙げた例のうちいくつかを表3に表す。

表3：比較によるイメージ

			イメージの変更	提示の変更
比較 1	ST	no bigger than a <u>sesame seed</u>		
	TT-D	nicht größer als <u>Sesamkorn</u>	－	－
	TT-J	<u>ゴマ粒</u> ほどの小さな	－	－
比較 2	ST	2600-acre		
	TT-D	－	－	－
	TT-J	<u>成田空港</u> よりもやや広い	＋（追加）	＋（比較）
比較 3	ST	nearly the same protein punch as <u>ground beef</u>		
	TT-D	ebenso viel Eiweiß wie ein <u>Steak</u>	＋（変更）	
	TT-J	<u>牛ひき肉</u> に匹敵するたんぱく質	－	－

4. 数量的分析

質的分析で見たように、言語によって表現された「たとえ」のイメージは、必ずしも3言語で共通するとは限らないことが分かった。変化の中身は、イメージの変更・削除・追加であるが、変更には一般化や同化も含まれていた。個別の実例の表においても変化が「＋」表示になるケースがかなり見られたが、では100件全体ではどの程度の割合で、変更がなされているのであろうか。この節では、その傾向を数量的分析により明らかにする。

まず、ST との比較においてイメージに変化があったかどうかは、表4と表5で示した通りである。まずドイツ語版においても日本語版においてもイメージに変化があるのはどちらも約半数に上ることが分かった。ちなみにドイツ語で変化があった48件の内訳は、イメージの削除が最多の27件、イメージそのも

のの変更が12件、イメージの追加が9件であった。一方、日本語版では変化があった51件の内訳は、削除が33件、追加15件、変更は3件であった。日本語では削除と追加がほぼ全てである。

さらに表5が示すように、同一イメージであっても補足説明などがついて提示方法が変化したものも「変化あり」に入れると、ドイツ語が51%であるのに対し、日本語版では66%に変更が見られた。

表4：イメージの変化の有無（100件中）

	TT-D	TT-J
イメージに変化あり	48	51
イメージに変化なし	52	49

表5：イメージと提示方法の変化の有無（100件中）

	TT-D	TT-J
提示方法を含めて変化あり	51	66
提示方法を含めて変化なし	49	34

さらに、ドイツ語版と日本語版でイメージの変更が見られたのは同一箇所とは限らず、むしろ同じ箇所にイメージの変更が見られたのは20%に留まることが分かった。日本語のみの変更は31%、ドイツ語のみの変更は28%であり、3言語で全く変更がないのは21%であることが判明した。これを表6および図1に表す。さらに3言語で変化のない21件の内、提示方法も含めて3言語で変化が見られなかったのはわずか11件であった。つまり3言語の比較によって見えてきたのは、それぞれのテキストにおいて引き合いに出される「たとえ」イメージが3言語で変化せずに対応しているのはわずか2割のみで、8割は日本語かドイツ語のいずれかで変更されていたということである。あるいは、補足などの提示方法の変更も含めると、約9割が変更を受けていたことになる。

表 6：言語別イメージの変化の有無（100件中）

変化あり	Jのみイメージに変化あり	31	79
	DJともにイメージに変化あり	20	
	Dのみイメージに変化あり	28	
DJともにイメージに変化なし		21	

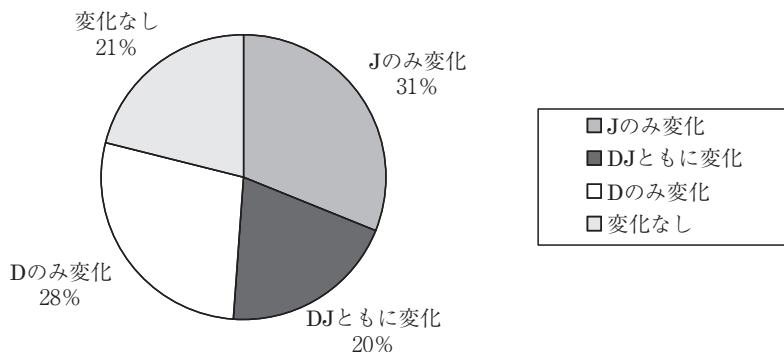


図1 イメージの変化

5. 結 論

本研究では、「たとえ」として引き合いに出されるイメージが雑誌翻訳でどの程度変化するかを、質的分析と数量的分析により調査した。例えばと譬えと比較は区別が難しく重なる部分もあるものの、一応の基準を立てて実例を考察した。

「たとえ」のイメージは、形状やサイズ等についての情報を伝える叙述機能も、印象に残る豊かな表現そのものの魅力である表出機能も、そしてユーモアや説得力をもつ訴え機能も果たしているようだ。そうした複合的な機能をもつ「たとえ」のイメージであるが、翻訳では全般的にかなりの追加や削除などの変更が見られた。譬えられたイメージがもつ豊かな「含み」や印象に残る効果や新たな認識を提供するイメージが引き継がれる例も確認できたものの、「たとえ」は、未知のものを身近に感覚的に把握させる「身体的理解」につながるものであるため、イメージを思い浮かべ難い例えは不適切として変更されたり（ミケーネ遺跡→ギリシャ遺跡）、読者の関心に訴えるような話題性やユーモア

を感じさせる仕掛けが新たに追加されたりしていた（白ソーセージ）。全般的には削除箇所が多かったが、イメージだけの削除も文全体の削除もあり、その原因がイメージの効果的な翻訳が容易でないためなのか、写真という視覚イメージとの関連やスペース等、全く別の理由によるかの断定は困難である。ただし、同じイメージを用いることが言語的に可能なときにも採用されるとは限らないようだ。いずれにせよ、様々な機能を含みもつ ST 表現のうち、言語表現の表出機能の対応関係を重視することは優先事項になっていないことだけは明らかである。それは、後半の数量的分析において、日独語版ともに約半数しかイメージを再現していないことから確認できたと言っていいだろう。しかも、3 言語で提示方法も全く対応しているのは、わずか 1 割であった。

雑誌には一冊の中に比較的短い記事がいくつも含まれており、読者は自らの興味に即して記事を選んで読む。文学作品とは違って、冒頭のページから全ての活字を順に読むとは限らない。とすれば雑誌の編集では、読む価値のある記事として読者を誘う工夫が施されていると考えてよいだろう。そして読者の興味を喚起する内容と方法が言語文化により異なるとすれば、翻訳版制作過程で何らかの変更が生じることになる。翻訳雑誌で見られたこの「たとえ」イメージの再現率の低さは、ひとつの注目に値する傾向を示していると言っていいだろう。つまり調査した雑誌においては、ST の言語上の表現方法を再現するという翻訳方法が優先されるわけではないことが実証された。大胆な削除や新規イメージの追加挿入などを見ると、むしろ TT 独自の機能の自立性が優先されていると思われる。雑誌テキストにも表出機能が重要であるとすれば、それは独立したテキストとしての ST ないし TT が効果的な表出機能をもつことが重要なのであって、TT が ST と同一の表出機能を再現するという意味においては、文学作品のように作家の文体的個性を重視するような表現型テキストとは、翻訳のあり方に大きな差があると言わざるを得ないだろう。

【註】

- 1) 念のため、ドイツ語を挙げておく：Jeder gute Golf- oder Tennisspieler kennt

den Sweet Spot seines Schlägers...

- 2) National Geographic 2010年8月号“Fossils”のページ（日本語版「化石」；ドイツ語版 „Auf einen Blick“）。
- 3) 念のため、英文の前後関係を挙げておく：...some of the largest of these armadillo kin wielded spiked clubs weighing up to 140 pounds, joined to the body by a series of bony rings.
- 4) ドイツ語：...dem Schwanz, dessen (bis zu 60 Kilo schweres) Ende an einen sogenannten Morgenstern erinnert, wie er in Kriegen des Mittelalters eingesetzt wurde. なおモルゲンシュテルンとは、棒の先端に星形の鉄球がついた武器のこと。
- 5) テクストタイプ別翻訳理論（Reiß 1971; 1976; Reiß & Vermeer 1984）では、テキストの機能によって翻訳方法に違いがあるとする（cf. 藤濤 2007b）。
- 6) 藤濤（2007a）では、文学翻訳における比喩表現を明示化の視点から日独双方向の比較分析を行なったが、翻訳による変更が少なく、原著者の文体上の個性を重視する傾向が見られた。
- 7) National Geographic 2010年8月号“Deep dark secrets”から。
- 8) 本稿では、認識や行動を規定する概念メタファーそのものを解明しようとするものではない。あくまで具体的なイメージが言語で提示されているものを対象とする。したがって概念メタファーのうち「時間を浪費する」という表現には具体的なイメージが提示されていないため対象外とし、「時は金なり」はイメージ提示があるため対象とする。
- 9) ドイツ語：Für Taucher eine ebenso große Herausforderung wie für Bergsteiger der K2 oder der Mount Everest. [逐語訳：ダイバーにとっては、K2やエベレスト山の登山家にとっても同じぐらい大きな挑戦だ。]
- 10) 1888年創刊の雑誌 *National Geographic* は、写真の美しさで定評があり、英語版とほぼ同時に日本語版やドイツ語版が刊行されている。写真とレイアウトという視覚的な要素がオリジナルと共通している割合が多いためページをめくってみても「同じ雑誌である」とのアイデンティティを感じさせる。しかしテキストを詳細に比較してみると、かなりの差に気づく。
- 11) 手作業での収集であり見落としや主観的判断が混入する可能性は否めない。
- 12) ドイツ語版ではこの箇所が省略されている。
- 13) 比較対象の明示されない最上級は扱わない。

【引用文献】

尼ヶ崎彬（1990）『ことばと身体』勁草書房

藤濤文子（2007a）「比喩表現の翻訳について」『ドイツ文学論集』36号 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 pp.31-53

藤濤文子（2007b）『翻訳行為と異文化間コミュニケーション——機能主義的翻訳理論の

諸相』松籟社

マンデイ, J. (2009) 『翻訳学入門』 鳥飼玖美子監訳 みすず書房

西村清和 (2009) 『イメージの修辞学——言葉と形象の交叉』 三元社

レイコフ, G. & M. ジョンソン (1986) 『レトリックと人生』 渡辺昇一他訳 大修館書店

佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』 講談社

瀬戸賢一 (1995) 『メタファー思考』 講談社

National Geographic. August 2010 / September 2010.

National Geographic Deutschland. August 2010 / September 2010.

National Geographic 日本語版 2010年8月号 / 2010年9月号

Reiß, K. (1971) *Möglichkeiten und Grenzen der Übersetzungskritik. Kategorien und Kriterien für eine sachgerechte Beurteilung von Übersetzungen*. Max Hueber Verlag.

Reiß, K. (1976) *Texttyp und Übersetzungsmethode. Der Operative Text*. Kronberg.

Reiß, K. & H. J. Vermeer (1984) *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie*. Niemeyer.

Translation Strategies of Magazine Articles: How ‘linguistic images’ of example, metaphor and comparison are translated

Fumiko FUJINAMI

The aim of this paper is to examine the extent ‘linguistic images’ of example, metaphor, and comparison are modified in magazine translation. An abstract explanation which is difficult to understand can be immediately grasped or made clear by giving a good example or metaphor, but a good example in the source text is not always good in the target text. Japanese and German translations of 100 linguistic images from the *National Geographic* are analyzed in quality and quantity. The outcome of the analysis is that Japanese and German translators used only about half of the images, while the other half were changed, deleted or added. For example “Mycenae” was translated into “remains of ancient Greece”; “a poisonous curtain” into “a divider”; “2600-acre” into “bigger than Narita airport” and many images were deleted.

Keywords : translation strategies, magazine, metaphor, images, functionalist approach

キーワード : 翻訳方略、雑誌、たとえ、イメージ、機能主義的アプローチ